

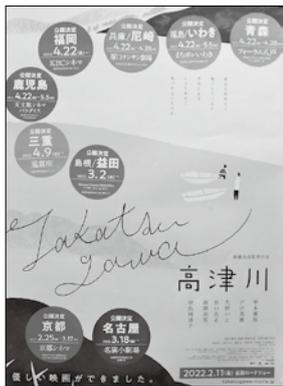


映画「高津川」 2年の延期を経て全国公開スタート

清流高津川と流域の魅力を全国に発信中!

益田市、津和野町、吉賀町を舞台に撮影された映画「高津川」が、コロナ禍による2年の延期を経て全国公開スタートとなりました。

2月11日から東京、大阪、出雲での公開を皮切りに、全国各地の映画館で上映されています。また、3月2日からは市内の映画館でも上映され、錦織良成監督をはじめ、出演者による舞台挨拶も行われました。



映画を観た人に訪れてほしい

映画「高津川」は、これまで何度も清流日本一に選ばれた高津川流域で撮影が行われました。映画を通じて、清流高津川とその流域の魅力が全国に紹介されています。

高津川流域の益田市、津和野町、吉

賀町の3市町の官民がつくる高津川流域都市交流協議会では、映画「高津川」を観て高津川やその流域に興味・関心を持った人に、実際に地域を訪れてもらえるよう取組んでいます。

高津川流域を応援しよう!

高津川流域コミュニティサイト
「となりの高津川さん」
オープン!



清流高津川の流域で育まれるたくさんの魅力。その魅力を全国に発信することで「高津川ファン」をつくり、遠くにおいても高津川流域を応援してくれ

るファンの方と流域に暮らす方が気軽に交流できるコミュニティサイトをオープンしました。このサイトでは、益田市、津和野町、吉賀町が一体となって高津川流域の魅力を発信しています。

となりに住んでいるご近所さんとの会話のように、ファン同士が気軽にコミュニケーションを取ることができる場所、それが「となりの高津川さん」です。高津川の魅力をもっと知りたい、想いを分かち合いたい、新しい魅力をつくりたいなど自分の関わり方で流域コミュニティを楽しむことができます。

会員登録をすると、誰でも記事や掲示板どちらにもリアクションすることが出来ます。気になる内容を見つけたら「いいね」をしたり、もっと知りたい内容を見つけたら「コメント」してお話ししたりしてみませんか?

★となりの高津川さん

<https://tonarino-takatsugawasasan.jp/>



映画のロケ地を巡ろう!

ウェブサイト「映画「高津川」ロケ地マップ」では、映画に登場するロケ地や周辺エリアの見どころスポットを紹介しています。

豊かな自然とどこか懐かしさを感じる優しい風景が広がる高津川流域。ロケ地を訪れて、映画と同じ情景をぜひ感じてみてください。



★映画「高津川」ロケ地マップ

<https://takatsugawa-location.jp/>



映画「高津川」の主人公 斉藤学役の甲本雅裕さんに、高津川の魅力や役作りなどについて伺いました。

(インタビュアー：護縁株式会社)

安川唯史プロデューサー

安川：益田、津和野、吉賀の皆さんは「お帰りなさい」という気持ちだと思います。

甲本：僕は「ただいま」という気持ちです。

安川：高津川を見た時の第一印象はどうでしたか。

甲本：「わっ」という感じです。感動した時って、本当に言葉じゃ表せないんですよ。単純に言葉とか音に出るんじゃないかって、心の中が「わっ」て。僕も東京で近くに川があるとところに住んでいきますけど、本当に癒されるんですよ。出かける時にはエネルギーをくれるし、帰りには癒されます。高津川の美しさを見た時に、川が近くにあることってありがたいんだなあと思って思いましたね。



斉藤学役の甲本雅裕さん

安川：父親であり伝統芸能を守っている牧場主という役についてはどうでしたか。

甲本：ものすごくあれこれ考えて益田入りしたんですが、高津川を見るとか、道を歩いてみるとか、会話するようになっていか、そうしているうちに頭でっかちになっていた自分がいて。心からここに入ることで生まれてくるものを、何で自分は考えられなかったんだろうって。持ってきたものを一個一個捨てていく作業っていうものが「斉藤学」に近いっていくんじゃないかな。頭で考えてできるもんじゃない。東京で台本を読みながら考えていたのが、この地に入って「そうじゃないんだよ」と言われているような気持ちになって。だから捨てましたね。

安川：撮影期間中一度も東京に戻らず、益田に滞在して、何か思われたことはありますか。

甲本：入る前に、せっかくこういう役を得て入れるんだから、東京には帰らないでいようとか、帰らない方が役をつなげていけるんじゃないかと頭で思っていました。でも実際に入ったら、単純に「帰りたくない」と思って：だからいたんです(笑)

安川：撮影に入ってから、地元のエキストラの方たちと話しているのを見ると、地元の方と馴染んでいる感じがしました。

甲本：それすらも、コミュニケーションをとらなければいけないと頭で考えていました。でもこっちに来て逆になりました。僕は、東京から来てここにいる。

それだけで「あと何かいる？」って思ってたんですよ。だから、あくまでも「僕は東京から来ました」っていう気持ちで絶対に忘れない方がいいと思ったんです。でも忘れてました(笑) 気がついていたら忘れてた。それで良かったのかになってしまいますね。どう考えても、この地に生まれ育ってきた人と同じになんてなれる訳がないんですよ。僕たちは芝居でそれを見せなきゃならないけど、そのバランスって役によって違うと思うんですよ。だから、この作品で何が一番大切なのか、錦織監督が書いた台本から僕なりに受け止めていたのが「無理なことはしなさんなよ」って監督が言ってるような気がしたんですね。「仲良くなってください」じゃなくて、僕が好きでいればいいって思ってたんです。

安川：左鏡と益田の神楽社中の方々と合同でやっていた時、そこに甲本さんがすんなりと役者として入られた、というより、普通に気持ちよく(そこに)いるっていうのを非常に感じました。

甲本：芝居が始まっている段階で、皆に協力してもらっているんだとか、来させてもらっているんだとか、そんなことはいらぬというところだけを思っていましたね。もちろん、芝居の前後では「ありがとうございます」っていう思いは消えないですけどね。

安川：(島根を舞台とする作品に多く出演している) 甲本さんにとって島根県とは、どんな場所ですか。

甲本：差し込むような、陽の当たる場所

です。人の心にすごく陽が差している場所ですね。

安川：益田に帰ってくると、自然に甲本さんが「斉藤学」に戻っている気がします。

甲本：島根って本当に「帰ってきた」って感じなんですよ、いつ来ても。当たり前前しか残ってないんですよ。当たり前前って、特別ななにかよりもっともつとすごいものなんです。自然に振る舞おうなんて一切してないんですよ。家の玄関を開けたら「ただいま」って言うでしょ？「当然じゃん」って言う思いなんですよ。

安川：最後に皆さんにメッセージを。甲本：きっと、皆さんからもらうメッセージで僕らは成り立っていると思う。ぜひ、観て、メッセージをください。

甲本雅裕さんのインタビューをはじめ、錦織良成監督との対談、斉藤七海役の大野いとさんとの対談の様子は益田市の公式YouTubeチャンネルで公開しています。ぜひご覧ください。



大野いとさんとの対談